尾形亀之助と北川冬彦: 「詩神第三回座談會」記録 の紹介(『尾形亀之助全集』未収録)と「童心」論 争の考察から

岩下, 祥子 九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程

https://doi.org/10.15017/25418

出版情報:九大日文. 19, pp.41-63, 2012-03-31. 九州大学日本語文学会

バージョン:

権利関係:

尾形亀之助と北川冬彦

全集』未収録)と「童心」論争の考察から――――「詩神第三回座談會」記録の紹介(『尾形亀之助

岩下 祥子

はじめに

があり、 雄の尾形 改訂版は先の全集刊行時には未発見であった尾形亀之助の作品 短歌で成り、 の編者である秋元潔は「既刊三詩集の全編と未刊詩篇、 助全集』(以下『全集』と略記)に収録されており、 には後の『全集』には付されなかった別冊の「尾形亀之助資料 って内容が更に補強されたのであるが、一九七〇年版『全集』 が収録されている。『全集』本編に関して言えば増補改訂によ た増補改訂版の二 月に刊行された最初の『全集』と一九九九年十二月に刊行され 〈知る〉ことが出来る。 一九七〇年版の内容について両全集 尾形亀之助の文筆によって書かれた作品の殆どは『尾形亀之 夢譚を網羅した本格的な全集」。と説明しており、 内容は「高村光太郎、草野心平、北川冬彦、吉田一穂、 辻まこと、秋山清、 詩のほかに評論、小品、エッセイ、無声映画シナ 尾形の書簡、 冊によって、読者は尾形亀之助という詩人を 月曜」 辻潤、 小森盛、 四号表紙と編集後記および 矢橋丈吉 一九七〇年九 戸田達 増補

のみであった。

「尾形亀之助資料」に収録されたのは「詩神第四回座談會」り、『全集』を多彩に補う資料となっている。しかし、昭和五年に「詩神」の企画によって行われ、尾形が参加した座談会には「詩神第三回座談會」(「詩神」第六巻八号、昭和五年八月)と「詩年に「詩神」の企画によって行われ、尾形が参加した座談会には「詩神第三回座談會」(「詩神」座談会記事」。と説明にあるように、奥付、マヴォ資料、「詩神」座談会記事」。と説明にあるように、奥付、マヴォ資料、「詩神」座談会記事」。と説明にあるように、

之助の詩の鑑賞を深める資料として「第三回座談會」をここに する資料は原文のまま、 を指す。以下、 年から五年にかけて北川冬彦と尾形亀之助の間でなされた論争 稿における〈「童心」論争〉とは詩誌 本稿は尾形亀之助研究を主眼に置き、考察を進めた。なお、本 との詩想の相違を「第三回座談會」での発言を踏まえて検証し、 紹介したい。資料紹介とともに、出席者の一人である北川冬彦 要な手掛かりでもあり、「詩神第四回座談會」と同様に尾形亀 る詩論の討議は、当時の詩の風潮や社会への態度を読み取る重 えることが出来ると言えるだろう。また、同時代の詩人達によ 話文という特色によって尾形の詩に対する考えを別の角度で捉 記)を掲載する。座談会記録は尾形の創作作品ではないが、会 録されなかった「詩神第三回座談會」(以下 考察を試みる。座談会は七名の詩人が集って行われているが 本稿では二冊の『全集』本編と別冊「尾形亀之助資料」に収 資料紹介、 旧字体を用いた 論考という順序となっている。 「詩神」において昭和四 「第三回座談會」と略

『尾形亀之助全集』未収録資料紹介

詩神第三回座談會

岡本潤・杉江重英・田中喜四郎・宮崎孝政『(順序不同尾形龜之助・萩原恭次郎・北川冬彦

ね。

たことからボツ~~始めて頂きたいと思ひます。萩原君どうでの對社會的態度、と言つては餘り漠然ですけれども、さう言つの對社會的態度、と言つては餘り漠然ですけれども、さう言うがいます。今日の座談會は現日本詩壇の檢討座談會といふや田中。ぢやこれから始めます。今日はお暑いところを有難うご田中。ぢやこれから始めます。今日はお暑いところを有難うご

居る社會と密接な關係がありませう。だから、さういふ種々ものは決定されて居りません。だがさういふ人々が體系にしてれた上から、詩作だとか生活をやつて居りますが、一般的な

萩原。詩人と言つても、プロレタリヤ詩人の對社會的に決定さ

發展して行くかといふ問題ですね。 な複雑な層を持つて居る關係から詩人がどんな詩作をやるか、 見る社會と答技な關係かありませが、たから、さごりる種々

のですからね。 のですからね。 のですからね。 ですからね。 では、さういふやうなときに、いいではついてゐないと、まり外に職業のないへボ詩人は乞食みたいなものですからね。一り外に職業があつて詩を書いて居る人と、さうでない人を……つまり、非常に問題だと思ふのです。つまり副業といふか、何か外尾形。けれども、さういふやうなときに殊更に詩人的といふのは、

の方でも、プロレタリヤの方は別として違ひはないではないかに對して居る。作品でもさう言つたものが現れる。これは文學思ふ。詩集一册出せば詩人となつた、といふやうなことで社會田中。さう言つた切迫つまつた生活をして居る人が割合に多いと

尾形 - 貰ふとゴシソプの列の莫大な女入上いふことになるんだね。((()) () () () () で原稿料なんか取れるのは勿怪の幸いだからね。

萩原 しかし、原稿料の問題は別にして、どんな詩人でも社會(哄笑)

から。

「しかし」原希料の問題に別にして、とんな試人でも社會的關係といふやうな問題には、ぶつ突かつてゐるんだ。その詩を書かうが、矢張りその詩人も作品の上ではなくても、人間を書かうが、矢張りその詩人も作品の上ではなくても、人間の社會的關係がどういふ社會組織の上に於て決定されてゐやうの社會的關係がどういふ社會組織の上に於て決定されてゐやうとしての自らの生活といふものは持つて居りますが、どういふものがごほかぎの詩を作らうが、どういふものがごほかがでいる。

だけのことであつて、極く近い例だけれども、隣り近所だとか詩を書いて、十五圓なら十五圓貰つて居るとするとそれはそれつまり僕なら僕が駒澤といふ所に住んでゐて、詩神なら詩神に尾形善詩人の社會的立場といふものは、どうにも言へないですね。

それから出入のそばやだとか、煙草屋だとか、さういふものに

は自分が「詩人」であると或る人逹に稱ばれてゐるといふこ

田中杉江君どうですか。

のものでしかないかね。(哄笑) 詩人であるといふことは、どうも髪の毛が長いと言つたやう あとは拂ひが惡いとか家が汚いとか、そんなこと 杉江 問題ではないだらうと思ふのですがね。 ふ風に言はれて居る人も、あるやうですから。結局僕だけの といふわけには行かないのだから しかし、これはたゞに僕の場合ばかりではなく、

とに何の關係もない。つまりはそれらの人達から見て自分が

あつて、さう一人の詩魂といふものが、

ザラに誰にでも分る

さうい

岡本 詩人といふものは失業者みたいなものだね 手近に、自分に例を取つて言ふのですが、僕は僕の詩を 尾形 あの人の詩は好きだと言はれた當人はさうした場合嬉し

見た或る一部の人から、君の詩は非常に生活的ではない。 常に生溫いと言はれることがよくありますが、 非

は、自分の生活に一生懸命になればなるほど、反射的に生活 ら行くと、さういふことを言はれるのはそれらの人逹からみ 至極當然とは思ふのですけれども、 しかし僕自身として 自信の氣持か

て、

だけ見て、生溫いとかなんとか頭から言つてのけてしまふこ 生活を見ないで、その人の書いたものだけをしかも一面的に です。自分の生活に一生懸命になつてゐる人であれば、ある ほどさういふ場合はあり得ると思ひますね。だからその人の からうんと懸け離れたやうな詩を書きたくなることもあるの

尾形 しかし、それに關心する必要はないのです。

とは、本當に親切な見方ではないと思ふね

萩原 第一困る。 單純にしか物を見て貰へないといふことは淋しいことだし、 人の詩人が世の中に、只好きだといふ意味でつくつてる以 けれども、 別段關心はしないのですけれども、しかしさういふ風に それは仕方ないと思ふな。少くとも一人なら

一君の詩が好きだといふものがあれば、

それはめつけもので

くないことはないでせう。

宮崎 君の(杉江氏に向つて)詩などは一見無關心のやうに見 そして、それをどう扱つてゐても君を批難出來ないのだ。彼岸 してゐる以上觸れてゐるものにはどうしても觸れてゐるのだ。 えても君自身が社會の一員であり、さうしてその社會に生棲

の人々から非常に遠ざかつてゐるやうに君が考へられても、君

宮崎 杉江 ではないか。 は君らしくゆけばいると思ふ。 しかし、これは決して愚痴ではないのだ。 社會人として君が認めて貰へないからといふ惱みがあるの

尾形 タゴールでも福田正夫でも誰でもいゝのですが、さういふ人 の一つの社會的な何かであるといふ具合に、多くの人からは が朝日講堂で講演をするとしますね。さういふ事柄が「詩人」 けれども、さういふことの反對に例へば有名な詩 人が、

思はれて居るわけなんでせう。

尾形 宮崎 さうすれば、 さうです

詩人にとつて、それが彼等を代表する一つの對社會的な現れで さういふところに出演する機會のない多くの

とでも僕は矢張り同じだと思ふ 社會的現れと言へば……僕はかうだと思ふのです。 エライ 杉江 かに休ませてやる詩もまたあり得ていゝとその中に暫くでも氣 る詩もいゝし、働き動かす詩もいゝけれども、その半面に、靜

はないのですかね。 だから杉江君の、さういふことの反對のこ

僕はこんな考へですね。驅り立てる詩もい」し、煽り立て

ものをちつとも偉く思はないもう一つの社會的なものがあると と云はれる人が、社會的に偉くなつたといふ社會と、さういふ 中には、叉何かの役に立つのではないかと思ふな。 持を落付けることのできるやうな詩も、ザワ~~した今の世の

岡本 僕は、死んだ人のことを言つても變だけれど、生田春月 の晩年に書いてゐた詩には非常に無理があると思ふのです。 杉江 しかし、立つ立たんといふことになると、やはり役に立つ 岡本 立たなくても構はないでせう。

あの人は自分の社會的態度といふものを無理に決めやうとし それは僕が春月氏に遭つたときもさう言つたのだけれども、 岡本 尾形 て居るのではないかね。役にたゝんより立つた方がいゝ。 それはまた別の問題だと思ふ。 だから立つ立たないのは問題でない。(作者にとつてはの意)

張りもつと僕はその人の、なんといふか内側から自然に起つて だが、あれは非常に無理があつて本當の態度でないと思ふ。矢 合せといふわけでもないがツケ元氣のやうな詩を書いてゐた。 決めやうとする社會的態度にギヤツプができて來て、その埋め てゐたのではないかと思ふのです。それで自分の現在の位地と、 尾形 例へばいま僕なら僕が非常に傑作ができそうだ。とさうい い。――といふことになる。さう考へると、その場合蚊と書か といふもの一匹のためにそれを書かないで仕舞ふかも知れな なものを書くより蚊に螫されない方がいると考へた場合に、蚊 ふ場合に、蚊がこの手のところに飛んで來た。そのとき、そん

杉江 僕自身として言へば、詩を書くとき、さういふことは何も 深く考へてはゐない。考へてはゐないのですけれども、出來上つ へる必要はないと思ふ。 れた或ひは書かれんとする作品との比較からくる價値なんか考

尾形 だから、さういふ意味でいふと、つまり今迄に殆ど何千萬 といふ詩があるわけでせう。その中でどの位が残つて居るとい たものを第三者から見た場合について言つてゐるのです。 だし、叉これから先に時間が無限にあるわけでせう。さうす ふこと (有機的無機的のすべてをふくんで) も興味のあること

ども、それは俺はかう生きるといふことだけで、外からとやか なかつたかと思ふんだが……社會的態度にしても、何にしても、 かうしろと言ふのは無理だと思ふ。僕といふ個人にとつては、 ふ。だから杉江君の場合だつてそれを無理にはたからどうしろ 合なんかもさういふ無理をせずにもつと素直に動いて行けやし たときには、どうも無理なところが目立つものだ。 生田氏の場 く强制されるべき性質のものではない。無理をして居る人を見 僕の社會的態度といふものは、自分で決つて居るつもりだけれ

來たもの、自發的なものが形をとつて來ないと無理になると思

それは結局何にもならないことになるのですけれどもね。ると叉それが殖えて行くに違ひない。けれども殖えて行つても

杉江 さう言へばさうだけれども。のは、君が社會に對する役目のことを言つて居るのだらう。宮崎 杉江君のさつき言つたのは、つまり詩人が詩を書くといふ

といふことだらうと思ふが、さうでないかね。もう一歩大切な現し、君自身が詩人であつてもい^ぢやないか宮崎 さうして、岡本君や尾形君の氣持は役目以外のことの、

杉江 詩人の對社會的態度といふことであつたから、さういふ風

に考へたのですよ。

果を考慮する必要はないと僕は思つて居るのです。 岡本 役目といふものはどうしても結果になつて來ると思ふ。 結

だからその役目といふものゝ露骨な現れは、詩を書いたつ

からその金を受取つて歸りに皆飲んで仕舞つたといふやうな取りに行く途中で、轉んで頭に瘤を出したとかいふ結果、それて、その詩は五圓なら五圓、十圓なら十圓になつてそれを受

す。 三つにも四つにも分れて行くといふやうに考へて居るので笑)だから作品と、その結果、それから得た結果といふ風に笑)だから作品と、その結果、それから得た結果といふ風に結果、さういふ結果の方が可なり重大でないかと思ふ。(哄からその金を受取つて歸りに皆飲んで仕舞つたといふやうなからその金を受取つて歸りに皆飲んで仕舞つたといふやうな

人があるのは困るといふのです。 杉江 たゞさういふ風に、單純にしか物を見ることのできない岡本 自分で生溫いと思はなければ生溫くはないでせう。

それはさういふことを言ふ人のことでせう。

はさういふ出來事に對して無關心であるべきだ。 宮崎 君が生温いなぞと考へてゐるものは、結果に於て强靭な宮崎 君が生温いなぞと考へてゐるものは、結果に於て强靭な

ふ意味で言ふとよけいに生温いですよ。 尾形 作品を比べても杉江君のよりも僕のものゝ方が、さうい

風な社會を頭の中に入れて、さうして社會的といふことを考へではないのですか。唯全體の社會といふものでなく、さういふイデオロギーといふやうなものを含めた社會に對する考へから萩原 杉江君が社會、社會といふのは、社會的なプロレタリア・

杉江 或は言ふ人がさういふ風に決めて居るのかも知れないね。

て居るのだと思ひますね。

(北川氏出席)

社會的であるには瞭に社會的であるがそれも解釋のしやうだのだから、朝日講堂で若しある詩人が講演會をやつて、それがる者からは野良犬のやうに思はれると云ふ社會觀の開きもあるる者には神様みたいに言はれて居る社會的な態度もあるし、あ萩原 社會的といふのにも一口に言つて二た通りあるからね。あ

すね。だから悲しいかな一つに社會的と云ふ觀念をもつて全部であるし、しない人には成り立たないといふことになるわけで

と思ふ。……さういふ場合に話を聽きに行つて、感心して歸

つて來た人逹には、それが一つの社會的態度を瞭にしたもの

といふことだけなら詩人に限らずどんな人間も現社會の組織の 只商品的におつ立てられてゐたといふ事になりませう。社會的 下にある、社會性をもつてゐるのだから、だが今までの社會的 社會の動向にはそんなに問題にせず、 萩原 しかし、まあ原稿料で生活ができる詩人の社會的位置と じく詩人であるといふやうな風にも考へられて來ますね いふ場合は別にして、叉現在に於てまるで一文も原稿料も入ら ない詩人にも、社會的位置といふものはあるでせう。今は漠然

決めて仕舞ふわけには到底行けないと思ふ。只、今までは詩

が出來たといふやうなことがあると、その人も矢張り大家と同

を書いて居るといふに過ぎないけれども、詩人の社會的位地と くらうとしてゐるのではないかと思ふ。今後はその人が單に詩 といふものに價値があり得るやうに考へてゐたのが、一般の詩 人の考で叉さういふところに詩人の社會的位地といふものをつ のものなんだと思ふなあ。 としてゐるかも知れないが、只詩人なんて名前はもと <- 便宜 が、名譽でもない社會的位置といふものを貼つておけといふ位 に詩を書いたもの或は饒舌つたもの、さういふものに社會の人

いふことは今までの反對の位置から考へて來られなければなら 詩 ?人の社會 尾形 た、その書いたものに對してこれは詩だといふことを誰かゞ言つ 何を書いても詩人だ詩人だといふことになると困ると思ふ。 た。その爲にその人が詩人だ詩人だというふことになつて、 だからそれが問題なんだよ。 だから僕は一つのものを書い

北川

ないと思ふな。

萩原

どこがです。

所謂社會的位置といふ意味では

的位置とかいふこと」は問題にならないと思ふね

萩原君がいま言はれて居るやうな意味では、

一般にはさういふ考へが未だに殘つて居る。それでその話 それが詩でないといふやうなことを言はれて、當人が詩のつ もりで書いたものでないものにまでそんな風に反對に窘めら (哄笑) つまりあれはあゝいふものに書いて居るけれども、

北川 これからは段々そんな考へ方は一般からなくなつて行く と思ふ。現に行きつゝある。 ないかね。そんな漠然たるもので。 萩原 そんなやうなヘンなことで成り立つて居るのが現在では

尾形 田 さうでせうな。 一般に詩人といふことを非常に特別に思つて居る人があ

て詩人であつたことから、それを土臺にして何かうまい食ふ途 だから、それをいろ~~な風に考へられて居るのです。曾

吟味しなければならない。若し問題があつて進められるなら、 らしめられた場合。その詩人は社會的位置といふ事をも一度 いでせうけれ共、唯さういふものが種々な社會的關係からあ からさういふ座り心地の好い椅子が特別にあつたわけではな が續いてあつたのですから……兎に角詩人といふても、

初め

れるやうなことになつて來る。

田中

さういふことが澤山あるね。

かゝる吟味の後になされべきだと思ふ

の政治的なもの經濟的なものに觸れて來るから社會的位置とい 活態度がロマンチツクだけではゐられないから、もつと社會 さういふ漠然たるものはとれてゆくだらうが、詩人の生

ふやうなものは反對にもつと露骨になるだらうと思ふ。 れるので不愉快だといふ人もあるが、それはそれに關心して居 けれども僕の言ふ意味は、詩集があまりたくさん出版さ

ふので、關心してゐなければ誰が詩人だつて構はないと思ふ。 つと詩を書けば詩人だと大きなことを言ふ、といふやうなこと るから言ふことであつて、そんなことは構はないと思ふ。ちよ を言ふ人があるけれども、さういふことに關心して居るから言 お歷々の社會的位置なんかどうだつていゝけれども、社會

を持つ人が出て來ると思ふ。だから今迄の原稿料で生活できて くなればなるほど、双方の社會に於てさういふ確乎たる位置 といふものがだんと一對立的になつて行つて、その對立が激し

ふものは出て來ると思ふ あた詩人といふものと、

内容は違ふけれども、

社會的立場とい

つてゐて、今度八百屋を止めて魚屋になつたといふ場合に、も う誰も僕を「八百屋さん」とは言はない。それほどはつきりと だけれども、さういふことは例へば僕なら僕が八百屋をや

萩原 八百屋さんだつて魚屋さんだつて、それは問屋の魚屋もあ 舁いで賣つて歩く魚屋さんもあると思ふのです。

イヤ僕は名稱を言つたのです。(詩人が詩人でなくなる

した生活はないわけでせう。(哄笑)

といふときの意味で)

萩原

名稱はいくら變つても、これからは益々名稱を頭の上に

肉體的に變つて來る、魚やさんになつたからと云つてあんた 振りかざしてこんがらかして來るものも出て來ると思ふ。だ が魚屋さんになつたあんたと今の無職のあんたとは經濟的

ピリツトは變らないと同様……

い。自分の主張をもつた人はどんな所に行つたつて、そのス の詩がイセイの好い猛烈な詩になるとは僕には考へられな

尾形 岡本 僕は、いつか「詩」といふものは傳說だと言つて叱られ 詩人といふことは一つの惰性みたいになつて居る。

萩原 つまり前はどうであれ、今は今、いま詩がある限 人といふものは社會的關係といふものもあると思ふ。 りは詩

たことがある。

萩原 尾形 々といふ考を、もつと社會的認識の下にそれを關係して出て來 今までの詩人のやうに可なり自分を中心にして、詩人々 けれども詩といふものは非常に變つて來ると思ふ。

萩原 尾形 既に變つて來て居る だから詩といふものは變つて來て居ると思ふ。

るのではないかと思ふ。

尾形 ないかと思ふ 詩といふものは書かれる文章の形式によつて決定されるのでは 昔は詩と言はれたものが現在は詩ではないと思ふ。だから

萩原 それでいま杉江君の話をしやうとして思つたのですが、杉 江君のやうな詩を書いて居つた人も、いま尾形君が言つたやう

しても詩が變つて來る。だからあなたが風景なら風景を詠ふ な社會が變つて來るほど詩が變つて來る。同じものを詠はうと 十年前の人が風景を詠ふ詩は、非常に雰圍氣とか狀態 北川 宮崎 するかしないかといふことだけだね 外に何か問題が新しくないのか

尾形 昔は、さういふ見解は持つてゐなかつたに違ひないので

とか、そのものに接したときの感情などが全然違つて來ると

思ふ。

すね。

宮崎要するに詩人の社會的態度も、 ことはないのですから の態度が、他の社會の人の態度と、これつばかりも違つて居る の態度も結局變らないのですからね。別に詩人といふ人種のみ 魚屋の態度も、うどん屋

尾形 詩人といふことはうどん屋であれ叉吾々であれ同じだと思 一般的に生きて行く上では同じだね。

とするものを持ち或は書かねばゐられない感じを持つた人が、 ふ。それをやつてゐても詩を書ける一つの技術者だね、書かう 書いて發表して始めてさういふ人は詩人といふ位置が得られる。

それ以外に人間的にどう詩人が偉いとか、うどん屋が偉くない

尾形 さうは決められない。うどん屋だつて詩を作られないわけ でないから。(「うどん屋」といふものを對立的に例にひくこと といふことは問題でない。

宮崎 さへ出來ぬの意味らしい うどん屋の頭だつて案外鋭敏なのがあるよ うどん屋の頭が此處にゐる誰よりも銳敏であつたりする

ことはたま~~以上にあるだらうよ。問題はそこに詩をどう

尾形君、君はいつかこの雑誌で僕が出世を氣にしてゐるとかな 詩人の社會的地位といふ問題が出てゐるので思ひ出すが、

ての考へ方はさつき言つたとほりなんだ。 んとか書かれてゐたやうだけれど、僕の所謂社會的地位につい

尾形 しかし、あの場合の妙な言ひ懸りは、いま更めてどうかう することはできないよ。

尾形 さうして置く方がよいでせう。 北川 しかし、僕はあれに對して返事をしなかつたから、この際 田中 ではその問題はこの位にして頂きまして……。 僕の立場を一寸辯明して置きます。

尾形 北川君のやつて居られる詩現實といふのは、 取材とかいふことについて、何かお話を聽きたいと思ひます。 と思ふのです。さういふ場合に於ける詩の形式とか或は詩の いま非常に日本の詩壇は内容外形ともに、みな轉形期にある あれはどう

北川 在來といふと漠然としてゐるが、題材はもちろん變つて はない。) (後記) 來るべきだと思ふ。(「詩・現實」は僕一人でやつてゐるので

いふものですか。題材などは在來と同じですか。

北川 尾形 なければならないから題材はどんどん變化する。 するとどういふやうな……

タリアの詩人は、 これからの詩人の眼は動いてゆく切實な現實に向けられ 眼の向け方に於いては間違つてはゐない 從來のプロ

ひます。 かもしれませんが、 作品の仕上げに對する技術がまづいと思

さうすると、それに對して「これは一九三〇年の 世 界の

ういふその人達が言明してゐる場合にですねつまり一九三〇 眼であり頭腦であると共に明日を創り出す手である」――か

て居ると言はれるのですか。

にそれもあるといふ第三者のそれに對しての考へ方は間違つ るといふ考へ方で、つまり他の色々なものがあると同じやう 年の中にかういふもの(「詩現實」といふやうなもの)があ

尾形 例へば玆(「詩・現實」の廣告文)に、一九三〇年の世

界の であるといふのがあるが、仲間の人達は、これからの詩とい 「眼」であり「頭腦」であると共に明日を創り出す「手」

ふものはこれでなくちやいかんといふ主張を持つて居るわけ

のがあるといふ私の考へ方は、あなた方にとつてそれどころ ですね、この中に。だから一九三〇年といふ年にかういふも

もがやらなければいけないといふ考へですか。 ではなく、これを最も尖端的なものであると主張して、誰で 大體はさうですけれども、 しかし、あれを文字通り取り

北川 萩原 上げられては困ります。 技術の鍛練に 「詩・現實」 つまり北川君がプロレタリヤの技術がまづい 「詩・現實」を出すといふのですね は一つの方向は持つてゐますけれども、 から吾々は

れからのものであつて、いまはつきりしたことは言へません。

萩原 論 とつて居たやうな表現は、ある點で補へるものはあるでせう 勿論技術といへばプロレタリヤの詩だつて、 の行詰りから發した打開的存在であること。 あなた逹が

たゞ、これだけのことは云へます。「詩・現實」

は

「詩と詩

北川 さうですね。アナキズムの詩人には優秀な技術を持つて ゐる人がありますね。 表現式を受入れることはできないと思ひますね ね。だがプロレタリヤ詩は絶對にその儘を「詩・現實」的の

萩原 なりまづい技術だと思ふ。 でせう。そこへ行くと岡本なんか、さういふ意味で行けば可 思ふ。可なり北川君は技術といふものを唯物的に考へてゐる 北川君の言ふ優秀さでない優秀さがあるのではないかと

萩原 北川 僕はうまいと思ふ。 對しての解釋はここにゐるみながみな違つてゐるのではない た詩の技術、あれなんかなか~~優秀だと思ふ。 さうですか。それが分つて來れば……。けれども技術に 岡本君の文藝月刊週刊號にのつてゐ

宮崎 かね。 0 ではないかね わけてプロレタリ ヤ詩の技術なんか、 解釋が違つて來る

宮崎 尾形 僕自身から見ると未來派の初期の作品とさう違はないかと思 ふのです。 技術の方面ですか。 北川君などのやつてゐる「シネ・ポイム」とい あれだけでは ふもの

尾 形 つまりあの書かれたものだけを見たならば、 未來派の初

期のものとほとんど同じものです。拾ひ集めたフイルムを切 つてペター、貼つて繋いだと言つたやうなものに思はれる。 未來派の詩は僕ははつきり知らないのですけれども、 さつき危險があるといま言つたが、僕らが文字を使つてシ

けでも違ふ。 る。 お来派の詩は僕ははつきり知らないのです。その點だ れはい本る羅列に終つてなかつたかと思ひますがね。僕なんかのは てると来派の詩は恐らく表現技巧だけから云つても、その方法は單 はなくを派の詩は恐らく表現技巧だけから云つても、その方法は單 はなくでもします。ま

尾形 イヤそれは僕のは多少(悪口批評がは入つて居るので萩原 未來派とは違ふだらうなあ。

立」も未來派はもつてゐた。 す。)未來派も決して立體的でなくないし北川君のいふ「組

| 式だから正しい道を歩いてゐるかどうかは早急に云へない。| 北川|| もちろん、シネ・ポエムはまだ生れて間もない詩の一形|

ポエムに大體二つある。一つは文字を材料とするシネ・ポエ

僕にもシネ・ポエムに危險のあることは判つてゐる。シネ・

ムと。一つは映像を材料とするシネ・ポエムと。

北川 僕達のやつてゐるのは文字の方を材料とするシネ・ポエと形 僕はそれらを總稱して言ふのです。

な、さういふ詩に對する態度は餘りいゝものでない。番尖端的である――かういふものが一番新しいといふやう程度でやられるのだと、いゝと思ふ。唯、かういふものが一程。――だから、さういふ場合にさういふものがあるといふ

新しいから新しいと云ふのはカマはんと思ふ。(後記)

れはいまゝでの詩に對する一つの醇化運動としてやつて居てゐるシネ・ポエム運動にしろ「新散文詩運動」にしろ、そはなく、一つの場面的な對象の正確さですね。僕たちのやつネ・ポエムは正確をねらひながら結局文學としての正確さでネ・ポエムを作る場合、フイルム的場面の方に賴つて了ふシ

に。そしてそれらのものも出來上つてゐないと同じやうう筈はないのは他の種々な同種類のものゝ運動と同じやうけたものになりました。で、それが「運動」としてわるから尾形 (後で色々と書き加へられてゐるので、この間は間のぬ

のです。(後記)
北川 藝術上の運動が生む一つの作品はそれ自身出來上つたもに――といふところから上へつゞくやうに讀まれたい!)

まさになつてゐる。

ないといはれる技術すら岡本の體質的なういふ氣がする。まづいといはれる技術すら岡本の體質的なうい。最近のが缺けてゐる場合のうまさより、まづい方が本當と宮崎 岡本の詩がまづいといふ話が出たが、岡本の持つて居る

に載つて居た詩はよかつた。川・非常にむらがあると僕は思ふな。ともかく「文藝月刊」

だから「生活レビユー」の中にある、 岡本が終の方の…

岡本 俺ばつかり問題にしなくてもいゝよ

宮崎 少し窘められた方がいゝよ。

『たとへその富籤を引き當てたところでオコボレ日給が

級」が雲集するのである。と云へば人事みたいだが、さうい 圓五十錢だ。そのオコボレに向つて我が東京市の 「知識階

ふ僕もその五千八百五十人の中の一人の No.1437 とは情ない

話だ』つまりかういふところのカラクリを突き貫く所に岡本 の取材がなくてはいけないと思ふ。勿論かういふところにも

行けば最もその事實に近いことをスラーとその儘に、はつ だな、岡本の飛躍の精神は一層欲しいと思ふ。岡本の詩まで

じやうとする投術論もそこにあるのです。ところがいま此處 きり取り上げることを一番の技術を思ふ。僕等がこれから論

宮崎 思つて居るかちよつと僕には可笑いと思ふ。 まづいことにきめるか。 (哄笑)

では大分岡本の評判がいゝけれども、それほどみんながどう

と思ふ。僕達の理論の最初に置きたいことです。 そのまづいところに僕達の新しい理論の物があるだらふ

尾形 さういふ技術のことをどうかといふことは非常に難しい

萩原のまり、 ゆう技術の中に、 いゝ詩を作る惡い詩を作るといふことは、 取材の正確の握み方によつて生れて來るの

る」といふやうなやつは、あれなどはなかなかはいゝと思ふ が、終の方にまた繰返して言つて居るところがある。あれは

例へば杉江君の先月か先々月か詩の「おしめを乾してゐ

一つの技術の上から要らないと思ふ。

杉江 後の方が餘計なものだといふのですか。これは に出した「雨日異臭」といふ自分の詩に就いて尾形君が言つ 「旗魚」

尾形 技術の上から行けば餘計なものだと思ふのです。けれど てゐるのである。(杉江後記) ふことになつても、上に述べたやうに結局はその人その人の ふやうに、技術としてだからその技術に就ては言へ得るとい たといふ考があれば、僕の言ふことは成り立たない――とい もそれも杉江君自身が、それはある方が技術としてはいゝの

萩原 定つた表現形式は必要でない。けれどもプロレタリアが かつてだといふことになる。

詩を書かうとするときに、誰でも心に持つて居るもので形に 文字にならないものが妙にこんがらがつてゐる。この場合は

స్త この人が詩としての技術を缺いてゐるといふに過ぎないと思

それでも詩が書けるといふことは、ひとりよがりだと思つて

の技術を持つて書く。だからその技術は指令的な技術、 居ても書けない人がある。だから書かうとする人は必ず一つ

的な技術とか云はれる、さういふ特殊的な技術でないと思ふ。 宮崎君が無技巧と言ふ事を云つたけれども、その技巧といふ

さういふものが技巧だと思ふ。つまりプロレタリヤと特に云 ものは技巧の上に技巧、その上にまた技巧、また技巧がある。 尾形 だつて構はない 兎に角僕の書かうとするものを書く爲には、いくら近く

はなくとも好い詩は自分の持つて居るスピリツトと、紙の上 宮崎 岡本のまづい技術といふのも大技術として最後の効果を獲

得すればいい

萩原 いふ意味のまづさではちつともない。僕はもつとかういふヂカ 問題として岡本のケツを引つぱたく爲に、まづいと言つただけ なものが誰にも作られなければならないと思ふ。只、その後の 岡本君の詩がまづいといふのも、 紙屑よりももつと悪いと

北川 も、その表現しやうとする對象がつまらなければ結局何んに だ。それは誰でもケツを引つぱたかなければ駄目だと思ふ。ま づい詩がいゝといふことは絶對にないのだから。 しかし、これからの詩人は單に立派な技術を持つてゐて

萩原 もつと素材的に進んで行くでせうね。素材はどういふも るには。 のが組み立てられるか、どういふものがあるかといふことが、 胸に締めくくりが無い限りは、またその素材も本當に生きて 來ないと思ひます。だから我々が素材に近付いて行かうとす

岡本 僕は詩のデツサンといふやうなものを考へて居る。 は結局僕等の仲間で詩をかく連中の範囲内で云ふ場合、 云ふデツサンといふものは、一つ一つの思想的訓練といふか

常に物足らなさを感じさせるやうな氣がするのだ。 單に言葉だけでないもの、さういふものが足らないために非 しかし僕は題材の撰擇といふことは、僕自身はほとんど

また草野心平だとかね

あれは技術としては立派な技術ですよ

萩原 さうでないのですか 技術に於ては大したものではないのですか。 れなければ駄目だからなあ の表さうとするものに近く現れるやうに努力することでせう。 迄の詩人といふものゝ座がある。 にはなれなかつたと思ふ。それでさういふ商品的技術の上に今 その上に技巧を加へない限りは現在の社會的な商品的な技術 上の一番近いところにあるものを獲得する技術、それは今迄 岡本の詩なら岡本の詩がさういふところに近寄つて居る。 確に獲得しやうといふのが技術の點である。さういふ意味で の商品的な技術、つまり技巧、 はない。誰もが一番近く自分に持つてゐる、その心臓と紙の れかと言つて誰も岡本のやうな技術が誰もにつくれるとは思 に置かれた活字とが一番近い距離にあるのだ。それを最も正 技巧を重ねて來た技巧とは違つて來る。技巧の上に技巧 兎に角技術といふものは、さういふ場合のものは一番自分 さういふ意味に於て龜ちやんの詩なんか非常に龜ちやん的 努力といふよりは効果と云ふべきでないか。努力しても現 だからその人はまづいといふことになるのではないか 虚構的な技術、技巧の上の技

もならない。

書くといふことをしない。それらのことはむしろ嫌いてゐる。 團扇なら團扇を持つて居る僕は、かう横になつても團扇を持 例へばツエツペリンを見たからツエツペリンの詩を 宮崎

のことか我ながら何のことかわからず) 何のことか分らないですからね。(團扇のところになつて何 な風に團扇を持つてゐる」「團扇を持つてゐる」ぢやつまり つてゐるのだけれども、唯、「僕は團扇を持つてゐる」「こん

萩原

田中 だん~~唯物的になつて居ることは事實でせう。

ことは少しもないから。

置場ばかりを使はなければプロレタリヤの詩だといふやうな

題材を假定だてる必要はないよ。プロレタリヤの詩が留

素材は社會にザラに轉がつて何處にでもうなつて居ると

尾形 やうな、その言ひ方はなんだか腹が立つてしやうはないとい 思ふ。それの取り上げ方はその詩人の生きる事によつて決定 されるでせう。 昔の詩人が夕陽を見て「夕燒けぶる」云云――とやつた

尾形 宮崎 素材は今後益々書く詩人の體質的なものになつて來てゐ これからでなくて、事實いまさうでないのですか

ふ具合に、だんぐ一變つて來たことは事實ですね。

の生活環境に含まれるその仲間の中では體質なんかでも違つ だから生活環境は誰にでもあるのだから、その中の一ツ 大體生活環境になるね

て來る人がある

これも體質から言ふと當り前でちつとも不思議でない。 さういふ意味で不思議なものは、酒を飮むといふことだ。

尾形 だから僕は酒といふものを餘り直接に考へて居るからか

尾形 田中 も知れないのです。飲み物として水やなんかと同じやうに考 あるのですけれども。(哄笑) へれば、この水は醉ふ水といふことにしかならない考へ方も どうですか、もつと論旨がありますか。

田中 ではこの位にして、どうもいろ~~有難うございます。 もつと窘められるやうな話だといゝですね

「詩神」(第六巻八号、一九三〇年 【掲載誌】 (昭和五年) 八月、 一三八~一五一頁

※本文は傍点、 括弧も含め、原文通り。

尾形亀之助と北川冬彦

「詩神第三回座談會」から見る「童心」論争

背景としての「童心」論争

詩集 なる朝』 昭和四年十一月 『雨になる朝』(誠志堂、 にあらはれた尾形龜之助は、季節の移り變りや 「詩神」誌上で北川冬彦は尾形亀之助の第二 昭和四年五月)をして、「詩集『雨に

ことは一度もないのであるから、 には詩がわからないのだといふあくたれをきゝたくない てはいささか反駁をなさゞるを得ない。 の反感ももたない。が、それが るといふのであらう。私は自分の芸術を新らしいと思つた ところの「童心」が詩集「雨になる朝」のどこに発見し得 人は旧いと言つてゐることに同じなのであるが、 た意味では存在しないことは、北川君の もはや現在のわれわれの間には「童心」といふ言葉がほめ であるかも知れない。が、全く、 などのセイ作の折りに「苦心」するそれを指して言ふべき 現在では 「童心」とは田舎の小学校の先生が 「童心」の故であるとあつ 旧いと言はれることに何 如何なる場合に於いても (中略) 私は北川 「童心」をもつ詩 彼の言ふ 2童謡

くないのだ。(引用は『全集』増補改訂版に拠る――引用者注)ないのであるから、間違つても「童心」などと言つてほし「童心」といふものを嫌ふ意味に於ては私も北川君にまけ

半部である。 を浮き彫りにするまでに到った要因が「童心とはひどい」の後を浮き彫りにするまでに到った要因が「童心とはひどい」の後た。「童心」という一語への観念が、尾形と北川の間にある壁た。「童心」という

ことをさらけだしたことにとゞまるといふことになる方がことをさらけだしたことにとゞまるといふことになる方が、私が彼等より新らしいと言ふ意味にではなく、私がある。こんなことをわざわざ言ふことはテレ臭いことである。。(中略) / 「詩と詩論」の運動が現在のやうな影響を他にあたへてゐることはかつて短詩型の運動が何時もともあってゐた「困つたこと」と同じことである。(中略) / 「詩と詩論」の運動が現在のやうな影響をもう種痘をしてゐるといふ意味でのみ述べてゐる次第である。(中略) / 「詩と詩論」の運動が現在のやうな影響を他にあたへてゐることはかつて短詩型の運動が何時もともはつてゐた「困つたこと」と同じことであることを残念に思つてゐる。そして、この一文が私の愚かさや学問のないことをさらけだしたことにとゞまるといふことになる方が

よいのであつて、更にお互(?)がこれにわをかけた愚か

さをばくろするが如き論争になることを私はさけたい (私はそれを北川君よりも春山君へより多くを希望す . の

とを明かしており、 評した文章の「詩と詩論」での掲載を春山行夫に拒否され 年十月に「詩集『鶴』を評す た北川からの批判を、「詩と詩論」からの不適格の宣告と受け (昭和五年三月)まで欠くことなく寄稿している。 北川冬彦は ―」(「氾濫」昭和四年十月)の中で、 「詩と詩論」 当時まだ「詩と詩論」に作品を発表してい 創刊時の同人であり、 主としてその 室生犀星の詩 尾形は昭 同誌に第 読者の たこ 七

形が北川の言葉を要約した「「童心」をもつ詩人は旧い」とい うことは、北川の「今日に於ては「童心」をもつてゐることは、 アクタイついていることである」と、「詩と詩論」との距離を 答へる」(「詩神」第六巻一号、 和四年十二月)に発表しているのである。 取らざるを得なかったのは理解出来ることであろう。北川 詩人としてむしろ恥づべきものではないか」という言葉や、 主張した。「詩と詩論」 番滑稽なのは、 ひどい」を「呂律の廻らない酔漢の愚痴」と一蹴した上で、「一 に「詩集「雨になる朝」について」と殆ど同文の「「雨になる について」を「雑感一束」として「詩と詩論」第六冊 新旧の基準は 僕のあの批評と直接關係のない「詩と詩論」に が「あの批評と直接關係のない」とい 「詩と詩論」にないこととなる。 昭和五年一月)で北川は、「童心とは しかし「尾形龜之助に は更 尾

> は当時 解 \vec{o} 動向 でを『 北 Ш 冬彦詩集』 (寶文館、 昭和二十六年九月) の

説で振り返った。

この世界は住むに耐えないところであった。 間」は、シュウルレアリスムの影響によって書いたものの 專ら「新散文詩運動」を唱えて詩形式の變革に大童だった。 詩精神)によるポエジイ運動を起した機關誌である。 なって、當時の新銳をすぐって、エスプリ・ヌウボオ 論」發刊第二年目である。これは、 現代詩の二大源流の一つとして動かせない季刊誌 我夢中でやっていたのであるが、今日から見ればたしかに 昭和四年と云えば、 ようである。しかし、私はこれらの詩風からすぐ脱却した。 (中略) 詩集「戰爭」の巻末に近い「光について」「花」「人 當時は、 それほどのものとも考えず無 春山行夫と私が中心と 「詩と詩 私は

は の結果、 行致しました。 転換について内面に即して語った。 と詩論」 と詩論」時代のことである。「新散文詩運動」を提唱して 唱したのは「詩・現實」(昭和五年六月~昭和六年六月) 創刊以前「詩 爭」を書いたのは昭和四年以前であり、 妻の尾形優が 常に変革を求める当時の北川の姿が判然とする。さらに、「「戰 「詩と詩論」との訣別を來したのである『」と、 の運動に訣別したのではなく、 その前年の年の暮、 「昭和四年五月、 第二詩集 当時の尾形の様子につい 私は彼と一緒に暮す様にな 「新散文詩運動 「新散文詩運動」 「雨になる朝 自身の を提

りましたが、 その頃から彼は次第に詩作しなくなり、 多くの

でない方の北川冬彦は 知る由もないだろう。事情を把握した上で尾形が書いた「馬鹿 けている「詩と詩論」と訣別しているなどということを尾形は の詩人達との交友が目に見えて減ったことが窺える。「詩・現 實」がまだ創刊を迎えていない時期に、北川が、作品発表を続 友とも故意に遠ざかつて行きました『」と記しており、 「読め」」(「詩神」第六巻第二号、 昭和五年二 同時代

語

殊に俺に何か言ふならもつと用心することだ。その方が君

って起きたであることが明瞭となるのである

既に「童心」論争が二人の詩人の詩論による違いによ

が

漢」などの文字を使つてゐるのだらうが、俺が酒飲みであ 稽なことでもある。俺がたまたま酒を飲むといふので「酔 く思ひこんでしまはぬ方がいゝ。君が左傾しやうがしまい うになつてはいけない。北川よ、反省などをしてはいけな とだ。君は偉いといふことをつまらぬことだなどと思ふや たわけだ。兎に角君は君の望んでゐるだけ早く偉くなるこ をするのだ」――と言つてゐるそれの邪魔をしてわるかつ せつかく「俺は超現実主義ではない、俺は左傾といふこと ぬのだ。(中略)「詩と詩論」に及んだことが、君がこの頃 れば尚のことこんな文字を使ふには用心をしなければなら が、さうしたことを一つの見えなどにしては今どき甚だ滑)得ばかりではない。も一つ注意するが、あまり自分を偉

> とが尾形の詩論を構成する時、 とが尾形の中で懸念されたのではないだろうか。 のない詩人は、詩によって「詩」とされる詩論にも飛び付くこ る。紙上の詩が「詩」とされることよりも「詩」が詩となるこ の結晶である紙面の詩は唯一無二の「詩」(ポエジー)表現であ 言外に訴えた。〈語〉への執着は尾形の詩作の態度であり、 から発された「童心」、「酔漢」への拘泥を見せることで、 い、北川による〈矛先の変換〉となるだろう。尾形は北川の側 は詩人が用いるまでもない一義的な語に過ぎず、皮肉も孕まな 酒客である尾形に向かって放たれる「酔漢の愚痴」という言葉 が詩人に根ざしているかという北川への糾弾である。 論争によって尾形の詩心が姿を現した時、 〈語〉に手を伸ばす際、そこに憚りがなければならぬことを 〈語〉に手を伸ばすことに憚り そこにあるのは、

「詩神第三回座談會」をめぐって

げかけた尾形の直球の問いである。北川は は、 おいても、「詩人は、今日一度はかならず 誰でもがやらなければいけないといふ考へですか」という言葉 れどころではなく、これを最も尖端的なものであると主張して、 かういふものがあるといふ私の考へ方は、あなた方にとつてそ 「題材」や 神第三回 座談會」の中の 「技術」以前の問題を〈詩人〉として北川に投 「だから一九三〇年といふ年に 「新散文詩運動 「新散文詩運

和四年十二月)と述べている。 條件である」(「雑感一束」― ままの、 であり、 先禮を受けなければならぬ。 北川は、 内容変化のない改革者であった。 「尖端」の自負とそれを周囲へ押しつける態度はその 新たに運動を提唱しても変革されるのは外装のみ 「明日の一形式」、「詩と詩論」第六册 これは、 「童心」論争も経た尾形から見る 今日の詩人としての必

『軍艦茉莉』(厚生閣書店、 第三回座談會」が掲載された「詩神」同巻同号に尾 軍艦茉莉 「第三回 .座談會」と同時期であることが顕著となる文面に という批評を寄せてい 昭和四年四月)への好評を記したも . る。 安西冬衛の第一詩集 形は 「詩 Ŏ

集軍

艦茉莉には

北川

が序を書い

てい

る。

北 頄

の

集

《戦争

中には沢山のあのグロツスの絵の焼き直しの如きものを

散見するが、 いふことになつてしまつてゐることは慶賀すべきことであ わからないといふのであまり人々の注意を引かなかつた 派によい作品をわれわれに見せてゐる。 と解されるもよしなきことではあるが、 うに記覚する。私の作品を童心云々と罵つた北川への返礼 ない)にはパールクレーの絵に似たものが相当にあつたや まねに終つてゐるが後者はそれが一 最近に到つて「安西」と言へば 安西の作品の短いもの かく一般にまで詩といふものの一歩の進 「よい詩」を書く人と (詩集の中にはあまり (中略) 個の詩境として立 前者は 彼のも 全く下手な のは

11

かにも女性的で、

しかもシンの据ったような、

だが、

やっぱ

ある。 回 などといふものと、 派の初期の作品そのままの張り紙細工の如きシネ・ みをもたらせた人として敬意を表すべきである。 彼の作品を同一視してはならぬ所以 即ち未来 ポエム

昭 須

が、 る。尾形君の絵は主にパステルで厚紙に描かれたものであった 当時私を通じて、 い絵だと私は思った」『という言葉や、村山知義の「尾形君はう話であったが、尾形の影響が多く、女性的な甘い色で、美し て個性的な、主として色の直線の交錯した絵であった。 ドイツにその名を僅かに知られ初めていたスウイスの画家であ 認出来る。村山は続けて、「パウル・クレエは私のいたころ、 エに感動していた」『といった絵画活動期の仲間の回想にも確当時私を通じて、その絵の写真のいくつかを見たパウル・クレ の、不可思議に美しくするどい感覚だと想った。 ら出発してモンドリアン風でもあり、三角を組み合わせた構成 尾形の作品は素晴しいと感激に値するものであった。 かる。尾形がパウル・クレーを愛したことは住谷磐根の「然し、 形の頭には北川との詩想の相違が強く認識されていることが分 を為す箇所に、 の」と北川を揶揄する言葉を用いて安西との違いを主張し好評 (門脇普郎-引用者注) の作品は、パウル・クレーが好きだとい 童心」論 いかにもノビノビした、ごく単 争に触れている点や「シネ・ポエムなどといふも 「第三回座談會」の片鱗が見え、この時 手純で、 しかも優雅な、 隣に住む門脇 未来派か それ 期の尾

書かない」と明言した『 私が最も尊敬する畫家である」

②と述べており、デューラー、 渡って通じる尾形の詩想を指摘し、自身とは相対する芸術観で ういう点で、 持ち出したのは、「シネ・ポエム」の内容についてではなく、「か 型のことになつてゐる」と述べ「私は詩型で詩は ないことになつてゐる。もつと不幸なことに詩とはい 型」によつて書かれてゐるが故にそれを詩と言は の齟齬から来したものであることを主張しているのである。 は北川と「対蹠的」であることを暗示させるのみに止まらず、 だろう。『軍艦茉莉』批評の一文に尾形が用いた「グロツス」 クラナッハ、グロッスのドイツ人画家の中、 口やデューラーやクラナッハやセザンヌやゴッホやと並べて、 ルデ・グロッスは、 あったことを振り返った。敬愛する画家について村山は とは全く対蹠的だった」と、表現媒体が異なっても絵画と詩に つて居るのです)」と非を認めることとなる話題を尾形が自ら ついて論議し「イヤそれは僕のは多少(惡口批評の意味がは入 ロッスは先の文章の 尾形は「傷ましき月評」の中で「不幸なことにわれわれは 一の心から動いて出て来たものと思わせるものだった。 論争の根本は北川の批判にあるのではなく、詩想自体 どちらかといえばドイツ的で、 レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェ 「ドイツ的」を代表する者として見て良い 座談の中「シネ・ ポエム」の技巧に 理論的であっ 同時代に生きたグ いかけな なければなら はゆる詩 11 「ゲオ いから ノそ 詩 合は あり、 う姿に「詩」を掌中で眺め得ず、 だろう」
『と言って批判した、「詩」を二の次に世評の価値基準 すべきことは、 に詩が重なるよう、 て畏敬を抱く尾形亀之助自身の「態度」を見る。「 のである。広告文の一語一語に詰問し「詩に對する態度」を問 で体裁を整える方法が「詩・現實」の広告文にも見受けられる であつたら、その人は人といふより着物に近いものなのである のある着物を着たゝめに、その人がしぶ味のある人間になるの 尾形が「詩集「鶴」を評す」の中で室生犀星を相手に「しぶ味 々たる執筆諸家の顔觸れを見よ!」と書かれてい り、加えて横光利一、佐藤春夫、伊藤整ら執筆者の名を並べ「堂 である!」という文句の他に「最尖端藝術の創造と批判」とあ 九三〇年の世界の眼であり頭腦であると共に明日を創り出 形が引っ掛かりを覚えた ゐない」という肝要な主張が待機されているからであった。 上」がることのないものなのである。完成することのない 完であることで「詩」として在り、 を詩と言ひ得ない場合が多い。殊に言葉に言ひ表はす多くの場 「詩といふもの」と言はなければ十分に言ひ表はせない」 更には座談会の後に書き加えられた箇所の「 「傷ましき月評」)というように、尾形にとって「詩」 言うまでもなく「詩」に近い詩を書くことであ 言葉と詩想の距離を近づけるために詩 「詩・現實」の広告文には「これは 掴みきれない大きなものとし 詩を持ってしてでも る (16)

「私は

は未

「童心」

ふものが一番新しいといふやうな、さういふ詩に對する態

「第三回座談會」が掲載された「詩神」と同じく、

昭和

りフワフワした流れて行ってしまいそうな絵で、

彼の詩と全く

度は餘りいゝものではない」ということが言いたかっ

出來上つて たからで

かつて

ず手

あまりきまりきつたことなので、私はそれで十分な満足はしな やうなものだといふこと」を発見したことが書かれ、「しかし、 年八月に出版された尾形の最後の詩集『障子のある家』の詩篇 「雨は水なのだといふこと」、「雨が降れば家が傘になつてゐる 雨天時に作者が「裸なら着物はぬれない」ことと と、ぼくは現代詩の発展にそって歩んできたといえそうである。

詩である。「学識」の冒頭一段落は尾形の詩境が呼応する。無化される事実に困惑する。感情を滲ませない尾形らしい散文

詩想は詩として封がされ、受け取る読者は無二の一日の混沌が滑稽から悲哀への一連を雨が包むことで瞬間と永久に結ばれた名付けながらも感慨なく噛み砕き、作者は自身の輪郭をなぞる。

かつた」と結ばれる。改めて発見した〈当然〉を、「学識

ゐる雨には何のかゝはりもないことだ。░かめてゐるうちにずぶぬれになつてしまふことも、降つて

かつて草箒を降り廻して、たしかに降つてゐることをたし

眼の前で雨

が降つてゐることも、

雨の中に立ちはだ

雨の下で何を為しても、

雨の主体となり客体に対する

の変革を目ざし、やがて詩の内容の変革にまで及んだ。顧みるはからずも明治大正の詩の変動期で、ぼくは何よりも詩の形式う。北川冬彦は自身の詩業を「ぼくが詩を書きはじめたころは、どのような詩を書いても「詩」は微動だにせず在り続けるだろ雨粒に変えることも出来ない。「詩」が存在するのであれば、や〈選択〉を施すことは不可能であり、「尖端的」な「新しい」や〈選択〉を施すことは不可能であり、「尖端的」な「新しい」

人である、自身の事実であるからである。詩作は〈効率〉や〈大人である、自身の事実であるからである。詩作は〈効率〉や〈大と振り返る。「現代詩の発展」に添った一人の詩人として北川と振り返る。「現代詩の発展」に添った一人の詩人として北川と振り返る。「現代詩の発展」に添った一人の詩人として北川と振り返る。「現代詩の発展」に添った一人の詩人として北川と振り返る。「現代詩の発展」に添った一人の詩人として北川と振り返る。「現代詩の発展」に添った一人の詩人として北川と振り返る。「現代詩の発展」に添った一人の詩人として北川と振り返る。「現代詩の発展」に添った一人の詩人として北川と振り返る。

おわりに

あり、尾形が執った「詩人の社會的態度」であったのである。のを知るために方法を用いずに心を研ぎ澄ますことが「詩」で

を模索し「詩」への接近を願う。未だ「出來上つてゐない」も

量生産〉を目指す〈作業〉ではないから、方法ではない

「さういふところに出演する機會のない多くの詩人にとつて、その社會的なものがあると思ふね」という発言は、直前の尾形のける萩原恭次郎の「エライと云はれる人が、社會的に偉くなつける萩原恭次郎の「エライと云はれる人が、社會的に偉くなつける萩原恭次郎の「エライと云はれる人が、社會的に偉くなつける萩原恭次郎の「東別」に主題が移っていく。前半部に於「詩神第三回座談會」は前半に「詩人の社會的態度」につい「詩神第三回座談會」は前半に「詩人の社會的態度」につい

代に生きる詩人たちについて「自分は官選の詩の役人でもない 明瞭であるが、座談の中、根本的な詩論において両者の間に不 覚的効果に頓着した様子が見られない尾形の詩の形式の違いは といった主張を的確に要約したものと言える。 化を組み入れた萩原恭次郎と、 会役の田中喜四郎がいながらも恭次郎によって話の要点が かった詩人であり、「第三回座談會」は主題の性質もあり、 れが彼等を代表する一つの對社會的な現れではないのですかね 一致は見られない。恭次郎は「詩に関する断片」の中で同じ時 ーキズムを貫いた萩原は詩作の題材も社会から離れることが 誰に属目するかといふやうな性質を帯びたものでもなく、 展開していく。平戸廉吉に共鳴し自身も詩に罫や字体 短詩における行替え以外には視 短い生涯にアナ

ま

せに在ることを漏らす。 ぎ」であると悟った。尾形が、 なぜ「理想」であり完成を迎えないのか、人間が「時間のふさ 「出來上つてゐない」ものを追い続けることである。「詩」は 座談中、詩人が虚無と背中合わ

と記している㎝。各々の場で「理想に驀進」することは、して呉れ。これが最大の希望だ。また相互の合言葉でもっ

また相互の合言葉でもある」

常に

た事なのだ」と語り、「君達は君達に自由に君達の理想に驀進

することでせう」と、「技術」でありながらそれを恒常的な

自分がその詩に力を感じたのは、

無言の中にその人と握手をし

いふ詩があるわけでせう。その中でどの位が残つて居るとい ふこと (有機的無機的のすべてをふくんで) も興味のあるこ さういふ意味でいふと、つまり今迄に殆ど何千萬と

力」を口にしたのである。

つてもそれは結局何にもならないことになるのですけれども うすると叉それが殖えて行くに違ひない。けれども殖えて行 叉これから先に時間が無限にあるわけでせう。

合のものは一番自分の表さうとするものに近く現れるやうに努力 尾形はその「技術」を「兎に角技術といふものは、さういふ場 と紙の上の一番近いところにあるものを獲得する技術」と言い に於ける技術を「誰もが一番近く自分に持つてゐる、 顔で通り過ぎていく「雨」である。 った詩は、絶対無二の瞬間と結ばれ存在し続ける。恭次郎が詩 「詩」は定義された詩で蔽うことは出来ないが、 時間こそが、新旧に拘泥する詩人が抗い、その度に素知らぬ 時の移ろいと共に変化する 瞬間に寄り添 その心臓

と言い、詩人であることの厳しさを示した。技術を詩型に固執 文筆では明かさなかった、 局何にもならないことになる」〈新しさ〉を狙う詩作を批判し、 てしまふのだ」。と述べた尾形であるからこそ、 約束されるものである。「何んとかしなければ詩は余技になつ し外装から整えた詩の視覚的な〈新しさ〉は〈古さ〉を未来に 人の骨」
『を自負する尾形はすかさず「だからその人はまづい」 が「努力しても現れなければ駄目だからなあ」と漏らせば、「詩 力」そのものと言い換えた。二者の技術論が通じ合う中、 詩人にのみ許され、 課せられる「努 錆びていき「結

ある。本稿では、 の場に立ち続けることで為してきた「詩に對する態度」が尾形 察した。北川との詩想の相違から、「よい詩」を書く「努力」 し、二者が直接に対話している「第三回座談會」を踏まえて考 た議論が見られる、 重きで語り、 「詩神第三回座談會」記録は七名の詩人が社会と詩を同等の 詩の「題材」から、 尾形亀之助と北川冬彦の「童心」論争に関連 当時の詩人たちの詩業を知る貴重な資料で 詩一篇の一語までを取り上げ

十四年十月)、『断片』(渓文社、 族主義に共鳴していく。短い生涯の中に『死刑宣告』(長隆舎書店、大正 口ポトキンを中心にした芸術の研究」を発刊したが、昭和十年以後、 の創刊や 北川冬彦(一九〇〇~一九九〇 宣言運動」の影響から前衛的な詩活動への意識が芽生え、詩誌「赤と黒! などに投稿。 『日本詩集』大正八年版に作品が収録される。 「MAVO」同人としての活動を経て、帰郷後の昭和七年「ク 大正七年川路柳虹の「現代詩歌」に参加、翌年詩話会編の 昭和六年十月)の二冊の詩集がある。 平戸廉吉の「日本未來派 民

群馬県勢多郡(現前橋市)生。

若い時から短歌に親しみ「文章世界」

の社会に対する態度であったことが認識されるのである。

七○・思潮社)〉と表記するため、本稿中の『全集』の出版年は西暦で記 編者である秋元氏が最初の『全集』を指す際〈『尾形亀之助全集』(一九

で城所、

連で安西冬衛も加えた四人で「亜」(大正十三年一月)を創刊、

富田と共に「面」(大正十四年一月)を創刊し、これらの活動が

った城所栄一、富田充に誘われ翻訳活動をこなしたことが縁となり、

大

滋賀県大津市生。七歳で渡満し少年期を過ごす。旅順中学で同級であ

短詩運動の中心を占めていく。その後、

詩の形式の革新を常に意識し「詩

と詩論」投稿時から新散文詩運動を提唱。芸術主義が色濃い

- 2 『尾形亀之助全集』(思潮社、平成十一年十二月、五九一~五九二頁 注2に同じ

3

- 座談会出席者の略歴を以下に記す。
- 尾形亀之助 (一九〇〇~一九四二) 宮城県柴田郡生。 未来派画家として芸術活動を出発したが、

詩集

- 子のある家』(私家版、 萩原恭次郎(一八九九~一九三八 し、全詩人聯合の発起人となる等精力的な活動を見せるが、第三詩集『障 『色ガラスの街』(惠風館、 昭和七年に帰郷。 「銅鑼」や「亜」といった詩誌の同人となり、 他界する昭和十七年まで詩作は止まなかった。 昭和五年八月) 大正十四年十一月)刊行の頃より詩人へと転 刊行以後、 詩人仲間との交友を避 自身も「月曜」を創刊
 - 岡本潤 (一九〇一~一九七八) 詩現代詩人会初代幹事長となり作を始めとする芸術活動に意欲的に牽引 を離れ社会を眼差し「詩・現実」(昭和五年六月)を創刊した。戦後も、 生涯の軌跡は常に尖端の意識に根差したものと言える。
- 等の詩雑誌を創刊し、 ナーキズムに共鳴し日本社会主義同盟に参加する。大正十年頃より詩作 を始め、 キズムを貫き、 埼 玉県児玉郡(現本庄市)生。 以後「赤と黒」(大正十二年一月)、「ダムダム」(大正十三年) その姿勢が岡本の詩と一体となって今日の読者に刺激 社会主義的な立場で詩活動を続けた。 青年の時よりくロポトキンを愛読、 ア

を与えるところとなっている。

田中喜四郎 広島県広島市生。 (一九〇〇~一九七五 田中清一とも称す。 実家は地主であった。「詩神」(大 北川冬彦

た雑誌であり、 正十四年九月~昭和六年十二月)は田中が詩壇の公器を目指して創刊し その目論見通り、 流派を問わない寄稿者と、詩、 散文、 6 三頁

した。 研究、 出版部、 詩集は戦前の田中清一の名で発表した『永遠への思慕』(富士印刷 翻訳等、 大正十四年八月)等があり、 ジャンルの彩りにも長け、多くの詩人の発表の場を確保 戦後も原爆への怒りを歌った『苦

杉江重英 (一八九七~一九五六) 富山県富山市生。大正九年、早稲田大学英文科を卒業と同年に宮崎孝

悶の花』(国文社、昭和三十七年七月)等を刊行している。

政、 瀬川重礼らと詩誌「森林」を創刊、 編集代表者となり積極的に活動 詩集に『夢の中の街』

る。 する。ニヒリズムが生活描写に投影された作風で、 (森林社、大正十五年十月)、『骨』(天平書院、昭和五年九月) などがあ

を執りながら詩作を続け、 石川県鹿島郡(現七尾市)生。七尾中学校を中退以後、 「現代詩歌」「帆船」等に作品を発表する。 小学校で教鞭 大

月

宮崎孝政(一九〇〇~一九七七)

集は他に『鯉』(鯉社 本現代詩辞典』(桜楓社、 ※詩人略歴は『萩原恭次郎全集第三巻』(静地社、 和六年一月) 正十五年九月)を刊行。 正十一年に「森林」同人となり、大正十五年処女詩集『風』(森林社、 がある。 昭和四年九月)、『宮崎孝政詩集』(天平書院、 昭和三年からは 昭和六十一年二月)、『尾形亀之助全集』(注2 「詩神」の編集を担当した。 昭和五十七年十月)、 Ī 昭 詩 大

> !同じ)、『現代詩大事典』(三省堂、 「詩集「雨になる朝」について」(「詩神」第五巻十号、 平成二十年二月)を参照した。

北川冬彦『北川冬彦詩集』(寶文館、 昭和二十六年九月、三二二~三二 昭和

8 7 注6に同じ (三二五頁 尾形優「尾形龜之助のこと」(『現代日本詩人全集12』創 完社、

9 九年四月、三二六頁 尾形亀之助「馬鹿でない方の北川冬彦は「読め」」(注2に同じ、 「詩神」第六巻第二号、 昭和五年二月 昭和二十 三六六

10 形亀之助全集』未収録資料の紹介と中村漁波林・黄瀛をめぐる詩壇一端 「〈語〉への執着」については拙稿「尾形亀之助はなぜ書くか――『尾

~三六七頁)※初出

[傍点引用文]

拘り」として考察を行った。 の考察――」(「九大日文18」平成二十三年十月、三十頁) に「語句への

12 出 住谷磐根 「詩神」第六巻八号、昭和五年八月 「尾形亀之助のこと」(「尾形亀之助」 六号、 昭和五十一年

11

尾形亀之助「詩集

軍艦茉莉」、(注2に同じ、三六七~三七六頁)※初

13 村山知義 「尾形亀之助遺聞」(「尾形亀之助」七号、 昭和五十一年三月)

15 14 尾形亀之助「傷ましき月評」(注2に同じ、 村山知義 『グロッス』(八月書房、 昭和二十四年十二月、 三三九~三五〇頁) 一頁) ※初出

16 「詩神」 「詩神」 第五巻第七号、 第六巻第七号、 昭和四年七月 昭和五年七月

17

尾形亀之助

「詩集「鶴」を評す-

主としてその読者のために――」(注

| 18 | | |
|---------------------|-------------------------------------|----------------------|
| 尾形亀之助「学識」(注2に同じ、一五六 | 点引用文] | 2に同じ、五○八~五一四頁)※初出「氾! |
| 八~一五七頁 | | 严」再刊号、 |
|)※初出『障子の | | 昭和四年十月[傍 |
| 巻第八号、昭和五年八月 | 22 尾形亀之助「因果の序」(注2に同じ、二四三頁)※初出「詩神」第六 | 年一月 |

Ī シネド ß 23 尾形亀之助「詩人の骨」(注2に同じ、一四八~一四九頁)※初出

尾形亀之助「さびしい人生興奮」(注2に同じ、三三七~三三八頁)※ 八四頁) 24 壇消息」第一巻第四号、昭和二年四月 子のある家』昭和五年八月 尾形亀之助「漫筆御免」(注2に同じ、二八〇~二八三頁)※初出 一詩

『障

昭和 (九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程一年)

21

五十七年十月、一八三~一九二頁)※初出「詩神」第五巻一号、

萩原恭次郎「詩に関する断片」(『萩原恭次郎全集第三巻』

一静地社、

昭和四

20 19

ある家』昭和五年八月

北川冬彦『詩のアンソロジー』(時間社、

昭和四十七年二月、

初出「詩と詩論」第四冊、昭和四年六月